

「大学英語教育における生成AI活用の可能性と実践事例」 —ESP・留学準備・オンライン英会話・批判的思考を支援する 生成AI活用の事例分析—

Exploring the Role of Generative AI in University English Education: Practical Applications and Case Studies — ESP, Study Abroad Preparation, Online English Conversation, and Critical Thinking Support —

堤 龍一郎
渡辺 幸倫

Abstract

The advancement of Generative AI, particularly since ChatGPT-4, has introduced new possibilities and challenges in English education. This study presents practical applications from both student and instructor perspectives, focusing on four areas: English for Specific Purposes (ESP), pre-departure study abroad preparation, online English conversation support, and critical thinking development. Case studies conducted in 2024 illustrate how AI-assisted roleplays enabled students to engage with industry-specific situations they had not yet encountered, helping those with limited workplace exposure build confidence in professional communication. Similarly, AI-supported research and interactive exercises provided students with opportunities to explore study-abroad environments in advance, offering a sense of familiarity before departure—especially beneficial for those with little prior overseas experience. In online English conversation practice, AI helped students who struggle with confidence or hesitation by allowing them to rehearse conversations beforehand, reducing anxiety and encouraging more active participation. Additionally, students engaged in critical reading tasks where they analyzed and refined AI-generated texts, identifying inaccuracies and improving content through revision. While AI presents significant educational benefits, challenges such as over-reliance on AI, differences in digital literacy, and ethical considerations must be addressed. This study highlights the potential of Generative AI to enhance learning experiences and offers insights into effective pedagogical strategies for its integration.

はじめに

近年、生成AI（Generative AI）は英語教育をはじめとする多くの教育分野において注目を集めており、特にChatGPT-4以降、AIの生成能力が飛躍的に向上したことで、教育の質や効率性に革新をもたらす可能性が広がっている。生成AIは、学習者一人ひとりに合わせた個別最適化、批判的思考を促進するためのツール、そして教育現場における新たな創造性の触媒として、多面的な役割を果たしている（OECD, 2023）。本稿では、2024年度に実施した生成AIを活用した英語教育の事例を紹介し、その意義や課題について検討する。

背景と生成AIの進化

生成AIの発展により、教育現場ではこれまでにない多様なアプローチが模索されている。ChatGPTを開発したOpenAI社は、AIの教育への応用事例について紹介する記事で、ChatGPT-4が単に学習者の質問に答えるだけでなく、学習者のレベルや興味に基づいて教材をカスタマイズし、学習体験をより豊かにする点が革新的であるとしている（OpenAI, 2023a, 2023b）。

また、英語教育研究の分野でも生成AIの教育利用の研究が進んでおり、International Journal of TESOL Studiesでは、2024年の特集号で、生成AI（特にChatGPT）の活用に関する多角的な分析を行っている（International Journal of TESOL Studies, 2024）。なかでもYamaoka（2024）は、日本の大学生を対象に、ChatGPTの使用が学習者の不安を軽減し、学習プロセスをより楽しいものにすることで、言語習得への積極的な関与を促す可能性を示した。特集全体としては倫理的課題、社会的スキル、創造性などへの影響など未知の課題もあるものの、英語教育のツールとして、学習者のモチベーションを高め、個別の即時フィードバックを可能とする点で、言語教育に変革をもたらす可能性があると結論づけている。

生成AIの教育的特長

生成AIの大きな特長の一つは、個別最適化である。従来の教育方法では、一般的な教室での学習の場で学習者の多様なニーズやレベルに対応することが難しい場面も多くあった。しかし、AIを活用することで、学習者一人ひとりにカスタマイズされた教材やシナリオを提供する学習が実践されている（和久 et al., 2024）。これは、例えばESP（English for Specific Purposes）のロールプレイで、学習者が特定の業界や職種で必要とされる語彙や会話スキルを実践的に学ぶために、AIがシナリオを生成し、教師と協力してリアルな学習体験を構築することが可能になることを意味する。

さらに、生成AIは利用者の創造性を引き出すことができるともされている（小川 et al., 2024）。この側面を英語教育で活用するとすれば、AIが生成するプロットや物語を利用することで、学習者が自己表現を広げ、言語スキルの向上に繋げることが想定できるだろう。これにより、学習者はただ言語を覚えるだけでなく、言語を通じて新しいアイデアを形にする能力を養うことができると考えられる。

コミュニケーションデザインの観点

生成AIを活用した学びはコミュニケーションデザインの観点とも親和性が高い。コミュニケーションデザインとは、情報やメッセージを効果的に伝達するために、デザイン思考、アート思考、批判的思考、データ分析、創造的対話を促すファシリテーションなどの多様なスキルを活用し、特定の対象に適した形で情報を整理・共有することを指す。最終的には、人と人、組織、社会をつなぎ、共感や行動を促す仕組みを設計することを目的とする。このコミュニケーションデザインの観点は、学習形態や教材づくりの場面においても重要である。特に生成AIを活用すれば、個々の学習者のニーズに合わせて、高いデザイン性を備えた教材や学習環境、さらにはインタラクションを即時的に提供できるようになると考えられる。これにより、より効率的で効果的な学びの実現が期待される。

これに関連して田中（2024）は、生成AIが学習者の探究的な学習を支援し、主体的な学びを促進する可能性を指摘している。具体的には、①仮説検証型探究学習、②創作表現型探究学習、③実践実習型探究学習という3つの学習方法を提案し、それぞれのプロセスにおいて生成AIがどのように活用されるかを考察し、生成AIは単なる情報提供ツールにとどまらず、学習者の思考を深め、創造的な発想を促す媒介者として機能しうることが示している。これは、コミュニケーションデザインの観点からは、極めて重要で、生成AIが学習者間の対話や協働を促進する媒介者として機能する点は見逃せない。

また、批判的思考と創造的対話の場を提供するツールとしても生成AIの価値は高い。教師がAIを活用して生成した教材や問いを通じて、学習者が主体的に考え、自らの視点を発展させるという学びが容易に可能となる。AIを活用したオンライン学習プラットフォームが、学習者同士の相互作用を活発化させ、学びのコミュニティを形成する手助けをしているとされる（Sharples, 2023; 野村総合研究所 nri, 2023）。

このように、生成AIは教育現場において単なる技術的なツールではなく、新しい学びのデザインを可能にする存在となる可能性を秘めているといえるだろう。

目的と構成

本稿は、生成AIを活用した英語教育の実践事例を報告し、教育現場における活用の可能性と課題を明らかに

することを目的とする。実践報告としての視点から、授業設計や学習者の反応、成果と課題を具体的に整理し、他の教員が活用できる示唆を提供したい¹。

以下の章では、筆者らの担当する授業で実践したESPロールプレイ、留学前教育でのシナリオ作成、オンライン英会話補助、AI生成英文の添削などの事例を紹介する。最後に、これらの事例を総合的に評価し、生成AIの今後の教育的可能性について考察する。

事例の検討

事例1：オンライン英会話の補助としての生成AI利用

授業名：基礎教育演習

概要

基礎教育演習は、1年生の秋学期におかれている必修授業で、学生が大学生としてのスタディースキルを習得することを目的としている。本事例は、全15回のうち4回を使い、学科で導入しているオンライン英会話プログラム（NativeCamp: <https://nativecamp.net>）と生成AI（ChatGPT）を組み合わせることで、英語の自律学習の促進を目指した。

背景と目的

従来の英会話実践では、学生が会話の流れをコントロールできず受動的な役割にとどまることが多く、相手の質問にうまく対応できないことから自信を喪失するケースが見られた。また、十分な準備がないまま英会話に臨むと、適切な表現が思い浮かばず沈黙してしまうことが多く、これが学習意欲の低下につながることも課題であった。そこで、本授業では、学生がオンライン英会話を効果的に活用できるよう支援することを目的に生成AIを補助的に活用することで、事前準備を強化し、学生がより主体的に会話を進められる環境を整えた。AIを利用することで、想定される質問や応答を準備し、会話のシナリオをシミュレーションすることで、学生が安心してオンライン英会話に取り組めるようにした。

本授業では、オンライン英会話を活用し、生成AIを補助的に利用することで、学生がより主体的に会話を進められるようにすることを目的とした。特に、自分で関心のあるテーマについて事前に準備した上で、一回5分のオンライン英会話のレッスンを複数回実施した。レッスン時間を5分に限ることで心理的負担の軽減と、会話の流れをコントロールする能力の向上を目指した。

実施内容

本授業では、学生がオンライン英会話を主体的に進められるようにするために、AIを活用した事前準備、クラウドを利用したデータ共有方法の確認、英会話実践、フィードバックの4つのプロセスを授業時間中におおよそ3から5回繰り返した。

（1）AIを活用した事前準備

- 事前にChatGPTを活用し、自己紹介や質問の作成、想定される問答のシミュレーションを行った。
- 音声出力機能を活用して発音確認を行った。

1 本報告では、教育研究者の視点から生成AIの活用について検討しており、AI技術そのものの詳細なアルゴリズムや技術的仕様に関する専門的な分析は含んでいない。本実践では主にOpenAIのChatGPT（学生が使用する場合には無料版、教員の使用は4o）を利用しているが、AIモデルの出力特性やバージョンごとの挙動には変動があるため、同様の取り組みを他の環境で再現する際には、技術の進化やモデルの違いを考慮する必要がある。

(2) Google Driveを活用したデータ共有

- ことばだけでは説明が難しい情報については、資料（写真、リンクのメモなど）を作成した。
- Google Driveを用いて講師へ共有することで、デジタルツールを実践的に活用する機会を設けた。

(3) 5分間のオンライン英会話実践

- 事前準備を活かし、学生が主導する形で5分間の英会話を実施した。
- 会話の流れを意識しながらスムーズな対話を目指した。
- 一部会話中にChatGPTを利用して表現を模索するという場面も見られた。終了後には自己評価を行い、改善点を分析した。

(4) フィードバックと再挑戦

- 英会話実践後、生成AIを活用して不足していた表現や語彙を補強し、再度5分間の英会話に挑戦した。
- 何度もこのプロセスを繰り返すことで、適応的な学習プロセスを体験した。

学生の反応

学生の多くは、AIを活用した事前準備が英会話のスムーズな進行に役立ったと評価していた。「事前に質問を考えていたことでスムーズに話せた」「準備した表現を活用できた」といった声が多く、AIのサポートによる安心感が見られた。一方で、「用意した質問が尽きると会話が途切れた」「シナリオ外の質問に対応できなかった」という課題も指摘されており、即興的な会話力の向上が課題として意識されていた。また、Google Driveやチャット機能の活用により、「リンクを共有することで説明しやすくなった」「チャットで補助しながら話せた」といったコメントもあり、デジタルツールの有効性が確認された。さらに、「繰り返すうちに自信がついた」「前回よりもスムーズに話せた」といった成長を実感する声も多く、継続的な学習の重要性が示された。

考察

本事例では、生成AIを活用することで、学生のオンライン英会話に対する心理的負担の軽減と主体的な学習姿勢の育成を図ることができた。特に、事前準備の充実により、学生が英会話の流れをコントロールする機会を増やし、自信を持って会話に臨むことが可能となった点は大きな成果である。AIを活用したシミュレーションは、学生が自分の英語レベルに応じた表現を準備し、予測される質問や回答を事前に練習することで、実際の会話における適応力を向上させる助けとなった。また、Google Driveを活用したデータ共有により、視覚的な補助を取り入れながら実際の会話を進めることができた点も、学習の質を高める要因となった。特に自分が会話をコントロールしているという感覚は多くの学生にとって自信につながったようであった。

一方で、AIによる事前準備を重視しすぎると想定外の質問に対する即興力が十分に発揮されにくくなることが懸念される。実際に相手が自分のシナリオ通りに話してくれない際に戸惑う様子はしばしば観察された。今後の展望としては、AIを補助的に活用しつつ、即興的な対応力を養うことや、リアルタイムでの応答を意識した実践的な活動を増やすこと等が考えられるだろう。

事例2：現場を想定したロールプレイの生成

授業名：English for Tourism and Hospitality

使用生成AI：ChatGPT（無料版）

概要

本事例では、観光・ホスピタリティ分野におけるESP（English for Specific Purposes）教育の一環として、学生自身がオリジナル教材を作成するタスクベースのプロジェクトを実施した。授業全体としては、観光英検の対策と教材作成プロジェクトを行い、生成AI（ChatGPT）を利用したのは、後半のプロジェクト部分であった。

背景と目的

English for Tourism and Hospitalityは、2年生以上向けの選択科目で、観光業界を希望する学生が多く履修する。例年、15回の授業の内、前半は観光英検2級対策、後半は実務を意識したESP教育を行ってきた。ESP教育では、実際の職場で求められる言語スキルを習得することが重要であるため、これまでは日本で容易に入手できる観光英語テキストを使用することが多かった。しかし、これらのテキストでは、学生が就職を希望する業界や業務とは異なる場面での英語使用に焦点化されていることが多く、学生の動機づけ上の課題があった。また、多くの学生は観光・ホスピタリティ業界での実務経験（アルバイトなど）がないため、現場の言語使用を想像することも難しいという状況があった。そこで、本授業ではESP教育の基本理念である現場の言語使用に基づく教材開発（Hutchinson & Waters, 1987）を学生主体で行い、実践的な英語学習を促進することを目的に、生成AIを活用し、実務に即した英語の会話シナリオを生成することで、現場を模擬した実践的な学習を試みた。

実施内容

学生はそれぞれ、自らが関心を持つ職種や業務内容を設定し、以下の手順でオリジナル教材を作成した。まず、将来希望する職場（ホテル、空港、観光施設、飲食店、小売業など）を想定し、業務内容を具体化した。その後、ChatGPTを用いて現場を想像し、モデルとしてのダイアログ（会話例）を作成し、実務で使用される表現を精査した。

さらに、ChatGPTを対話相手としてロールプレイを行うためのプロンプトを作成する経験を授業内で実施し、予約メールの対応など、実務に即したやり取りのシミュレーションを行うことで、臨場感のある学習体験を提供した。加えて、PlayHTやChatGPTに発話させ、録音することで音声教材を作成し、発音練習を促進した。学習者自身の発話練習としてシャドーイングを取り入れ、実践的なスピーキング練習を可能にした。各段階の概要は次の通り。

（1）観光英語テキストの概観

- 大学観光英語テキストに求められる点（河原，2014）を確認し、教材作成の視点を確認した。
- 大学での観光英語用テキストや市販のインバウンド対応書籍（販売店員の英会話など）合計40種ほどを概観し、一人2冊を選んで詳しく分析した。

（2）職場環境の設定

- 学生が将来希望する職場（ホテル、空港、観光施設、飲食店、小売業など）を想定し、業務内容を具体化する。
- 実際にアルバイトなどをしている場合には、その場所としても良いこととし、できる限り実際の店内の様子や対応・案内などを反映した詳細な設定をするようにした。

（3）ChatGPTを活用した会話生成

- 職場環境として設定したものを利用して、ChatGPTを用いてモデルとしてのダイアログを作成し、実務で使用される表現を精査した。
- 出力された英語表現が難しい場合には、現在の英語力で発話できる表現になるまで調整を繰り返すようにした。
- 必要なジェスチャーも同時に出力させ、統合的なスキルを意識するようにした。

（4）ロールプレイのプロンプト作成

- 作成したダイアログをもとに、ChatGPTを対話相手としてロールプレイを行うためのプロンプトを作成する経験を授業内で実施した。
- ChatGPT上では、文字でのチャット形式に加えて、できる学生はアプリを利用した音声対話での練習も実施するようにした。
- 学生が想定していた場面は音声での対話を前提とすることが多かったが、なかには打ち合わせの予約メールの対応など、ChatGPTとの文字チャットがかえって実務に即した臨場感のある学習体験となる場合も

あった。

(5) 音声素材の作成

- 発音やリスニング練習用に、原則無料アプリを使ってダイアログを音声化することとした。
- 授業内で無料の音声化アプリをいくつか紹介し、学生が使いやすいものを使うという形にしたが、PlayHT (<https://play.ht/>) や ChatGPT に発話させ録音する者が多かった。

(6) 教材の構成

- 教材は1レッスン分をめどとし、自由な構成とした。
- フォーマットはテキストと音声の組み合わせだけでなく、動画での作成も可とした。典型的な構成は次の通りだった。
 - ・ 会話シナリオ
 - ・ 単語・表現リスト
 - ・ 音声学習（発音練習を含む）
 - ・ 練習問題（穴埋め、ロールプレイなど）

作成された教材の例

本プロジェクトでは、学生が以下のような多様なシチュエーションを想定した教材を作成した。

- ホテル業務（チェックイン・チェックアウト、観光案内）
- 空港・航空業務（チェックインカウンター、機内サービス）
- 小売業（お土産店、衣料品店での接客、書店での販売）
- 飲食業（カフェ、バーテンダーの注文対応、施設案内）
- 美容サービス（エステサロンでのカウンセリング）
- テマパークでの外国人対応（アトラクション案内、飲食ブースでの対応など）
- ビジネス英語（メール対応、ミーティングのリマインド、予約メールの対応）

学生の反応

学生の反応としては、まず、生成AIを本事例のように使うことを考えていなかったことから、使用方法への驚きが大きかった。また、実際の業務を詳細に想定することで、必要な英語スキルの向上や、AIを活用したロールプレイの有効性を実感する声が多かった。特に、ChatGPTを活用したリアルな会話シミュレーションや予約メール対応の練習は、臨場感のある学習体験となり、実際の業務を想定した実践的なトレーニングにつながったという感想が多かった。また、音声を活用した練習が発音やリスニング能力の向上に貢献したとする意見も見られた。

考察

本事例では、生成AIを活用することで、現場経験のない学生でもリアルな会話を学ぶ機会を得ることができ、学生の主体的な学習姿勢の向上が確認された。実際にありえる会話例を基に、頻出単語や表現を学ぶだけでなく、自分が必要とする文を音声化することで、スピーキング・リスニングの練習をすることも行うことができた。さらにChatGPTに適切なプロンプトを入力することで、自分だけの設定でのロールプレイをすることも可能となり、より能動的な学習が促進された。特に、予約メールのロールプレイは、実務に近いシミュレーションとなり、実際の業務を想定した学習に適していることが確認できた。使用したツールはすべて無料のものであり、コストをかけずにESP教育の質を向上させる実践例となったと考える。

この取り組みは、ESP教育におけるAI技術の活用可能性を示す実践例であり、観光・ホスピタリティ業界における英語教育に新たな視点を提供するものといえるだろう。

事例3：留学事前準備のためのシナリオ生成

授業名：Pre/Post Study Abroad Program

概要

本事例では、Pre/Post Study Abroad Program の一環として、学生が留学前に必要な準備や異文化適応の方法を学び、実践的な英語表現を身につけることを目指した。授業全体では、本学が提供する留学・語学研修プログラムの理解、生活スキルの習得、文化的適応力の向上など、多岐にわたる内容を扱った。その中で、特に生成AI（ChatGPT）を活動の中心に行ったのが、「留学先のリサーチ」、「自己紹介の作成」、「トラブル対応のシナリオ学習」の3つの領域であった。

背景と目的

Pre/Post Study Abroad Program は、1年生から履修できる選択科目で、留学に必要な知識技能を身につけることを目指している。例年、15回の授業では、各留学・語学研修プログラムの概略、各種の申請手続き、留学先での生活に必要な知識や基礎的な言語表現などの知識面に加えて、留学・語学研修先について自ら調べることのできる技能の習得を講義と練習で構成されていた。しかし、講義で提供される知識や「問い」に対して学生が受け身になりすぎることや各学生への個別のフィードバックに課題があった。そこで、本授業では、留学するにあたって想定されるさまざまな状況への対応方法の学習を目的に生成AIを次の3つの分野で活用した。それぞれのプロセスを詳しく説明し、考察を行った後、全体の考察をまとめる。

実施内容

1. 留学先のリサーチ項目の出力

「留学先のリサーチ」では、それまでの「一般的に求められる項目」を提示された上での調査ではなく、「何をなぜ知るべきなのか」という問いから始められる点を意識した。まず、学生がChatGPTを活用し、「留学前に調べるべき項目」をリストアップし、必要な情報を英語で検索するスキルを養った。学生は、気候や治安、生活費、医療環境、大学のサポート体制など、個々の関心に応じたテーマを設定した。ChatGPTによる検索では、ハルシネーションなどにより不正確なものが出てくる可能性があるため、AIにより検索用のキーワードなどを出力した上で検索エンジンなどを利用して情報収集を行った。このプロセスを通じて、情報の取捨選択の重要性を理解し、英語でリサーチを行う際のポイントを学ぶことができた。活動は原則グループ分けをして行い、パソコンは各自で持参することとした。各段階の概要は次の通り。

活動内容

(1) ChatGPTを活用し「留学前に調べるべき項目は何か」をリストアップ

- 自分の気になることを調べるだけでは「抜け」が出てしまうが、それをChatGPTに聞くことで、網羅的なリストを作成することができた。
- 項目は無数に出力されてくるため、グループでの話し合いによって、重要なものを選択していくこととした。

主なリサーチ項目

- ・生活環境：気候、治安、交通手段
- ・学習環境：授業スタイル、英語レベル、サポート体制
- ・文化：マナー・ルール、宗教、食文化
- ・生活費：家賃、食費、通信費
- ・医療：医療機関の充実度、留学生向け保険制度

(2) グループでメンバーごとに調べる項目を決め情報収集を行う

- ChatGPTはハルシネーションをうのみにしてしまうことを避けるために検索目的に使うのではなく、検索ワードを生成するのに使うこととした。
- 検索はGoogleなどを主に使用して情報収集を行った。

(3) 得た情報を整理し、グループ内で共有

- 収集した情報は英語のものが多かったため、ChatGPTを利用しながら整理していった。
- 整理した情報を使って、プレゼンテーションの準備を行った。

(4) クラスで発表

- 発表の台本づくりでも、まずChatGPTで下書きを出力し、それを校正していく形で完成させた。
- 発表に慣れていない者も、自信をもって発表できるようになっていた。

2. 自己紹介の作成と調整

自己紹介の作成では、まず、どのような相手かを十分に想定し、どのような自分を演出したいかを考えるように指示した。学生はChatGPTに「自分についてのキーワード」を日本語で入力し、英語の自己紹介文を生成。自己紹介する相手をホームステイ先、授業のクラス、など複数のシナリオを作ることで、相手によって自己紹介を調整することの必要性を意識化するよう促した。その後、難しい単語や言いにくい表現を簡単なものに修正する作業を繰り返し、自分が自信を持って話せる英語に調整していった。日本語から英語に変換するにあたって、細かい修正と調整を、授業時間外でも自由に即時にいくらでもできるという利点を重視した。

最終的に、作成した自己紹介を使って発話練習を行い、スムーズに伝えられるようにすることで、英語で話すことへの抵抗感を減らし、自己表現力を高めることにつなげた。

活動内容

(1) キーワードの入力

- ChatGPTに「自分についてのキーワード」を日本語で入力し、英語の自己紹介文を生成。
- 例：「大学2年生」「横浜出身」「趣味は料理と読書」「異文化交流をしたい」

(2) 表現の調整

- 生成された英語が難しすぎる場合、ChatGPTに「簡単な表現にして」と指示。「英検3級程度」などの指示が効果的だった。
- 実際に練習した上で、発音しにくい単語があれば「発音しやすい表現」や「話しやすいリズム」に変更してもらうような調整も行った。

(3) 発話練習

- 完成した自己紹介を繰り返し練習し、暗記した上で、ジェスチャーも加え、全体としてスムーズに話せるようにする。
- グループ内で自己紹介を行い、フィードバックを受ける。
- クラス全体でトーク・フォークダンスの形式で相手を変えながら自己紹介を定着させていった。

3. トラブル対応の学習

「トラブル対応の学習」では生成AIによって留学前には想像の難しい留学先などで起こり得るトラブル場面や対応の選択肢とそれぞれの利点・欠点を合わせて示してもらうことで、自分なりの対応を考える材料とし、異文化適応力・問題解決力の向上を目指した。具体的には、トラブル対応のシナリオ学習では、ChatGPTを活用して留学先で起こり得るトラブルをリストアップし、その背景を学んだ上で、提示された。それぞれの対応策のメリット・デメリットを考えながら選択する活動を行った。また、各選択肢に適した英語表現を学び、ジェスチャーを含めたコミュニケーションの仕方も学習したことで、異文化適応力、問題解決力、英語力の統合的なスキル向上にもつながるように留意した。

活動内容

- (1) 留学先でのトラブルシナリオを作成
 - ChatGPTに「留学先で起こり得るトラブル」をリストアップさせる。
 - 例：「ホームステイでの食事問題」「ルームメイトの掃除トラブル」「交通機関の遅延」
- (2) トラブルの背景を学ぶ
 - なぜそのようなトラブルが起こるのか、文化的背景を理解する。
 - 例：「食事の好みの違い」「掃除に対する価値観の違い」
- (3) 対応策を考える
 - AIに「どう対応すべきか？」を質問し、選択肢を提示してもらう。
 - 各選択肢について「なぜそれを選ぶのか」を考え、理由を述べる。
 - 相手がどのように反応するかシミュレーションをして、自分の選択肢を客観的に考える機会を持つ。
- (4) 英語表現とジェスチャーの学習
 - 各対応策に適した英語表現をChatGPTに出力してもらい、ジェスチャーと共に練習。

トラブル対応の例

- ・ シナリオ：ルームメイトが掃除をしない
- ・ 選択肢：
 1. 何も言わずに自分で掃除する
 2. ルームメイトに直接頼む
 3. 掃除スケジュールを作成する
- ・ 対応策の英語表現例
 - 直接頼む：“Could you help with cleaning? It’s a bit much for me alone.”
 - スケジュールを作成：“Let’s make a schedule so we both know when to clean.”

学生の反応

学生の反応として、自己紹介では、相手によって表現を変える必要性を実感し、自分の言いたいことを調整できるAIの利便性を評価する声が多かった。また、AIのサポートにより、自分の英語が正しいという自信を持ち、安心して発話できるようになったことも発話の促進につながったようだ。トラブル対応では、解決方法が一つではなく、それぞれに利点と欠点が当然のこととして学び、深く考えるきっかけになった様子であった。

考察

本事例では、ChatGPTを活用することで、学生が主体的に学習に取り組み、情報収集、自己表現、異文化適応のスキルを総合的に向上させる機会を提供した。特に、留学前の準備として、学生が「何を調べるべきか」を明確に意識し、英語での検索スキルを向上させることができた。加えて、AIを活用したリサーチは、情報の取舍選択や信頼性の判断といった批判的思考力の育成にも寄与すること意識した。自己紹介の作成では、自分の英語レベルに応じた表現を選択し、繰り返し調整するプロセスを通じて、実用的なスピーキングスキルにつながるように訓練した。また、AIによる即時フィードバックを活用することで、授業時間外でも自主的に試行錯誤を行う環境を提供できた点は大きな効果を上げることにつながったと考える。トラブル対応の学習では、異文化環境での問題解決力を強化することを目的とし、実際の場面を想定したシナリオ学習を実施した。AIを活用することで、学生は単なる模範解答ではなく、選択肢の比較検討を通じて、自身の価値観や行動の傾向を振り返る機会を得た。また、ジェスチャーや非言語的コミュニケーションの重要性に意識を向けさせることで、言語以外の要素を含めた統合的対話スキルの訓練につなげることができた。

これらの結果を踏まえると、AIを活用した英語教育は、単なる語学スキルの向上にとどまらず、異文化理解、批判的思考、問題解決能力を高める教育手法として有効であることが指摘できる。特に、学生が自分のペースで

学習を進めながら、リアルなシナリオに基づいた実践的なトレーニングを行える点は、従来の指導方法を補完し、より効果的な学習・教育へと発展させることにつながるだろう。

事例4：英語力向上に資する批判的思考力へのアプローチ

授業名：English C II

使用生成AI：ChatGPT 4o

概要と目的

本事例では、大学2年生の必修英語科目において、多読と精読を通じて英語による読解力を向上させることを目的とする。特に、学習者が能動的な学びを実践し、批判的思考を養うことを重視する。本授業では、映画作品の字幕セリフを教材とし、多角的な視点からの読解を促進する。

作品選定の基準として、以下の4点を設定する：

- ・英語圏の社会文化的コンテキストが検討可能であること
- ・感情移入しやすく、読解に対する積極的な姿勢を促進する物語構成であること
- ・明確な正解が存在しない問題を含み、多様な視点からの批判的思考を必要とすること
- ・映像テキストとセリフが相互補完的であり、加算的な情報処理が可能な構成であること

背景と課題

物語のコンテキストや登場人物の心情、価値観や世界観を読解する際、セリフというテキスト情報が存在する以上、生成AIが回答を提示することは可能で、それを学習者が回答として使用することが十分に予想される。しかし、生成AIの回答には不正確な情報や誤った推論が含まれることがあり、問いの意図に適切に答えていない場合も多い。そのため、AIの出力をそのまま正解とするのは不十分であり、読解力を実践的に養うという学習の目的にも合致しない。

重要なのは、生成AIの回答を吟味するプロセスであり、学習者がその内容を批判的に考察することが求められる。しかし、単に批判的思考を促すだけでは、学習者がAIの出力を「参考」としながらも、その内容に依存してしまう傾向が生じるという課題があった。そこで、本実践では学習プロセスを逆転させ、生成AIが出力した回答を「不完全であることを前提」として提示し、学習者自身が修正・加筆を行い、より適切な内容へと仕上げる活動を設計した。

この方法により、学習者は単にAIの回答を利用するのではなく、その妥当性を検証し、自ら修正を加えることが不可欠なプロセスとなる。結果として、批判的思考が自動的に組み込まれ、学習者が主体的に読解に取り組むことができ、その結果英語学習という側面も強化される狙いのもと、本ワークを実施した。また、取り組み時では、グループで情報や考えの共有をする時間を設け、学習者の進捗の様子を見ながら机間指導などを通して、修正の手がかりを示すといったスキaffォールディング（足場掛け）も行った。

実施内容

1. 事前準備

- ・生成AIを活用し、特定の映画チャプターの要約を英語で生成。
- ・要約の生成条件として以下を設定：
 - 設題意図と目的の明確化
 - 文量と学習者の英語レベルに応じた負荷調整
 - Temperatureパラメータを調整し、推論の強度を適正化
 - 明示的な誤情報や語弊を意図的に含め、修正課題を付与

- ChatGPTの出力内容を教員が事前に検証・修正し、教材としての適切性を確認

2. 設題とワークの設計

・設題

- 設題1：「以下は、映画冒頭の内容についてChatGPTが作成した要約です。この要約の誤りを修正し、情報が不足している箇所を補足してください。」

- 設題2：「設題1において加筆・修正を行った理由を説明してください。」

・設題意図

- 設題1（要約修正）

学習者が映画の冒頭部分をより深く理解し、物語の要点を整理する能力を養うことを目的とする。生成AI（ChatGPT）が提供した要約に対し、誤情報や不正確な表現を特定し、自らの視点で修正・加筆を行うことで、批判的思考を伴った読解力の向上を促す。また、物語の構造やテーマを理解することで、よりの確な英語表現を習得し、自らの言葉で情報を再構築する力を培うことを狙いとする。

- 設題2（修正理由の説明）

学習者が修正箇所について根拠を明示し、論理的な説明を行うことで、批判的思考力とアカデミックな論証能力を強化することを目的とする。この過程を通じて、単なる言語運用能力にとどまらず、「なぜこの修正が必要なのか」を明確にすることで、論理的な文章構成力やメタ認知的な視点の育成を図る。また、英語圏の文化的背景や価値観を踏まえた修正を求めることで、言語と文化の相互理解を深める契機とする。

3. ワーク内容

- ・ 設題1：要約文を原稿校正スタイルで編集し、修正箇所を明示。
- ・ 設題2：修正箇所ごとに根拠を記述し、必要に応じて原作のセリフを引用。

学生の反応

本実践を通じて、学生は単に「正解を見つける」受動的な学習から、「自身で答えを構築する」能動的な学習へと移行したことが確認された。特に、AIの出力をそのまま受け入れるのではなく、誤りを発見し、適切な修正を加えるというプロセスを経験することで、学習への主体的な関与が強まった。加えて、一部の学生は、より納得のいく表現を求め、自発的に追加のリサーチを行う姿勢も見られた。これは、AI活用によるより深い読解力向上だけでなく、情報リテラシー力の発達にも寄与する可能性を示唆している。

考察

本事例では、以下の6点において効果や課題が浮き彫りになった。

（1）判断と意思決定の向上

AIの出力を「正誤」で判断するのではなく、「どのように修正すべきか」を検討する過程を組み込んだことで、学習者は多角的な視点を持ち、より精緻な意思決定を行うことが求められた。この活動は、単なる言語学習にとどまらず、情報の取捨選択や論理的な思考の強化にも寄与すると考えられる。また、意識的な判断や意思決定を経て、自ら修正した内容に対してこだわりを持つようになり、結果として学習プロセスへの集中力やモチベーション向上だけでなく、修正結果に対する達成感につながった可能性がある。

(2) 編集力と校正力の向上

修正作業を繰り返すことで、学習者は文章の精度を高める「編集者」的な視点を持つようになった。学習者によっては、単に誤りを直すのではなく、より適切な表現や語彙選択を求めて試行錯誤を重ねた。このプロセスは、翻訳者のように「意味を正確に伝えるために情報を精査し、調整する力」を育む結果といえる。総じて、納得のいく表現を見つけるために追加でリサーチを行う学生も見られ、能動的な学習態度の促進にも寄与した。更には、最終的に日本語でリサーチしたとしても、それを英語に置換することでライティング力の向上に寄与すると考えられる。

(3) 問題発見力・疑問を持つ力・問う力の育成

本実践では、学習者が受動的に情報を受け取るのではなく、生成AIの出力に対して「この情報は正しいのか?」「何が不足しているのか?」「情報を受け取る側にどう読解されるのか?」と積極的かつ多角的に問いを立てる態度が前提となるため、問題点を発見するための疑問を持つ意識や、問う力の育成とその習慣化にも貢献しうると思われる。ここでも情報の送信側・受信側と視点を移行させるためメタ認知力の向上にも貢献しうる側面も見受けられた。

(4) 生成AIを学習に活用するためのリテラシーの向上

学習者が学習の助けとしての生成AIの利用が当たり前になりつつある現代において、AIに「使われない」ことはもちろん、単にAIを「使う」だけではなく、生成AIが提供する情報の信頼性を見極め、「どのように利用すべきか」を考えるリテラシーが求められるが、本実践では、生成AIの出力を鵜呑みにするのではなく、その精度や妥当性を精査し、適切に活用する力、少なくとも知的謙虚さや学問的誠実性の意識を養う実践となることが示唆された。

(5) 学習者間の差異と今後の課題

本実践を通じた、学生間で少なからずワークプロセスやアウトプットの質に差が生じた。英語力や習熟度別で分けられたクラス編成ではないが、これがそもそも批判的思考力に帰する差であるのか、英語力の差であるのかが一目では判別が難しかった。英語力が高い学生ほど、あるいは批判的思考力が高い学生ほど生成AIの出力に対する違和感を敏感に察知し、より高度な修正を加える傾向があるのか。また一方、英語力が低い学生は、あるいは批判的思考力が低い学生は生成AIの出力をそのまま受け入れてしまう傾向が見られるのか。今後これらの仮説を検証する必要性が示唆された。

(6) 生成AIの能力向上と温度調節の必要性

本実践を通して、すでに生成AIの能力が向上しており、出力の質が高まっていることも観察された。以前のバージョンに比べ、より自然で明らかな誤情報が混ざらない要約を提供するため、単純なプロンプトでは明らかな誤りを見つけることが難しかった。そのため、学習効果を最大化するためには、AIの温度設定 (temperature parameter) を適切に調整し、あえて推論を強めたり誤解を生じさせたりする工夫が必要になってくる。この点に関しては、本事例のような学習スタイルに特化したアプリケーション開発の可能性の模索など、今後の課題として捉えながらも、学習者側の適正な学習負荷となるよう、適切な設定を常に見極めながら活用する力が教育者側に求められ、本実践例のように、絶え間ない実践例の共有やアップデートが必要になると考えられる。

総合考察

本実践報告では、生成AI (ChatGPT) を活用した英語授業を通じて、学習者の主体性の向上、批判的思考力の育成、情報リテラシーの向上に寄与する可能性を示した。特に、以下の三つの側面からその意義と課題を考察

し、今後の展望を示したい。

学生の英語力・学習意欲への影響

本実践では、AIを活用した学習環境が学生の英語学習への積極性を高めることが観察できた。AIとの対話を通じて自己表現の機会が増え、自ら話そうとする意識が強まったことも確認できた。また、AIを活用した事前準備により、ロールプレイの質が向上し、即興的な対話力も伸びたことも成果といえるだろう。これまで英会話に対して消極的であった学生も、AIが提供するシミュレーションを活用することで、安心感を得ながら会話に参加できるようになった点は、高く評価できる。

協働学習・コミュニケーションデザインの効果

AIの導入は、単なる個別学習の支援にとどまらず、協働学習の促進にも効果的であった。特に、グループワークの際にAIを活用することで、学習者同士の相互作用が活発になり、より深い学びが促された。例えば、AIを用いた事前リサーチをもとにグループ内で意見を共有し、AIが提供する異文化的な視点を加えることで、より多角的な議論が展開された。また、ピア・フィードバックの場面では、AIが提供するモデル回答に対してはほかのメンバーに対してと比べて気軽に批評を加えることもできたため、適切なフィードバックを表現する能力が向上したことも感じられた。このように、AIの活用が、協働学習の質を高め、学習者の視野を広げる役割を果たす可能性を示すことができた。

生成AIの授業活用への課題

一方で、AIの活用にはいくつかの課題とリスクも伴う。最大の課題は、AIの出力内容の正確性を確認する負担が教員と学習者の双方に生じる点である。AIが生成する情報には誤りが含まれることがあり、特に専門的な内容を扱う際には慎重な検証が必要となる。このため、教員側の指導負担が増加することが懸念される。また、学習者間のICTリテラシーの差がAI利用の格差を生む要因となる点も重要である。デジタルツールに慣れている学生はAIを積極的に活用できる一方で、技術的なサポートが必要な学生にとっては、AIの活用が学習の障壁となる可能性がある。

さらに、プライバシー保護や著作権といった法的問題も無視できない。AIの利用規約を順守することは当然のことながら、学習者が作成したコンテンツとAIが生成したコンテンツの区別を明確にし、適切な利用方法を定める必要がある。

また、教育実践としての本報告は、特定の授業・学習環境に基づくケーススタディであり、すべての教育機関や学習者にそのまま適用できるものではない。特に、学習者の英語力、デジタルリテラシー、授業の設計方針によって成果が異なる可能性があるため、読者にはそれぞれの教育現場に適した形で応用することを推奨したい。

図表 1 本稿事例の比較

事例	活用方法	主な目的	学習者の反応	成果と課題
事例 1 : English for Tourism	AIによる 会話シナリオ作成	実務的英語習得	主体的な学習姿勢の 向上	実践的な英語力の 向上
事例 2 : Online English lesson	AIによる会話準備	会話力強化	事前準備の有効性を 実感	即興力の向上が課題
事例 3 : Study Abroad Prep	AIによるリサーチ・ 自己紹介作成	留学準備	AIの活用方法に関心	文化理解の深化
事例 4 : 批判的思考	AIの出力を修正・ 分析	批判的読解力の 向上	AIの修正過程に 積極的に関与	主体性と分析的 読解力の向上

今後の展望

今後は、AIを活用した英語教育をさらに発展させるために、いくつかの取り組みが求められる。まず、教員側のスキルアップが不可欠である。AIの適切な活用方法を学び、ICTリテラシーを向上させることが、質の高い授業運営につながるだろう。また、本報告のような機会をとらえてAIの活用方法について他の教員と事例を共有し、学習コミュニティを形成することも重要である。これにより、実践知を蓄積し、より効果的な指導方法を確立できることだろう。

加えて、AI利用に関する指針のアップデートが求められる。大学・学部単位で倫理規定や評価基準を明確化し、教員がどのようにAIを教育に利用するのか、学習者がAIとどのように向き合うべきかを示すガイダンスを提供することで、自信をもって適切なAI活用を促すことができるようになるはずである。

また、ESP授業に限らず、一般英語やビジネス英語、さらには他言語教育や異文化コミュニケーションといった領域にもAIの活用を広げることが考えられる。AIは目標言語の利用されている環境を描いてくれる点は学習者の動機づけに肯定的な影響を与えてくれる可能性が大きい。多様な学習目的や環境に適応できるため、他分野への展開も十分に可能と考える。

最後に、AIを活用した学習の効果を継続的に検証することが必要である。本報告は、ごくわずかな授業内での実験的な取り組みを描写したものにはすぎない。定量的なデータを取得し、学習成果を評価することで、AIの教育的効果をより正確に把握できるだろう。研究倫理手続きを整えた上で、中長期的なフォローアップや学習者インタビューを実施し、学習者の成長や学習態度の変化を詳細に分析することが求められる。

このように、本学科はAIを学ぶことが目的ではないが、AIを積極的に活用した学習をすることで、結果としてAIを利用した活動が可能になっていくという流れが現実的だろう。そのため授業内外でAIを効果的に活用しながら、学習者の主体的な学びを支援し、より質の高い教育環境を構築することが、今後の課題である。

おわりに

本報告では、生成AIを活用した英語教育の実践事例を通じて、学習者の主体的な学びの促進、批判的思考力の育成、および情報リテラシーの向上に寄与する可能性を示した。AIの活用により、学習者は受動的な知識の受容者から、能動的に情報を分析・活用する主体へと変化し、学習の質が向上することが確認された。

特に、生成AIの支援を受けながら行う事前準備やロールプレイ、シミュレーションなどを通じて、学生の英語運用能力が高まり、即興的な対話への対応力も向上した。また、批判的思考力を養うためにAIの出力を精査し、修正する活動を取り入れることで、学習者は生成AIの情報を鵜呑みにせず、自らの判断で適切な表現や内容を選択する習慣を身につけることができた。さらに、生成AIが提供する異文化的視点を活用することで、英語学習が単なる言語習得にとどまらず、多文化理解の深化にも貢献することが明らかになった。

しかしながら、生成AIの活用には、学習者のICTリテラシーの差、生成AI出力の正確性の確認、教育者側の指導負担といった課題も伴う。特に、学習者がAIに過度に依存せず、批判的に活用できるようにするための指導が今後の重要な課題となる。加えて、倫理的・法的な側面を踏まえたAIの適切な運用ガイドラインの整備も求められる。

今後、AIを活用した英語教育をさらに発展させるためには、教育者のスキルアップと実践事例の共有、学習者のリテラシー向上を目指した指導の工夫が不可欠である。また、AIを活用した学習の効果を継続的に評価し、より効果的な活用法を探索することが求められる。本報告の知見を踏まえ、生成AIを活用した英語教育が単なる補助ツールにとどまらず、学習者の言語運用力や思考力を高める教育デザインの一環として確立されていくことを期待したい。

Acknowledgments

The authors sincerely appreciate the assistance of ChatGPT-4 in the initial English translation of the abstract of this paper. The AI-generated translation was carefully reviewed and refined by the authors to ensure accuracy and alignment with the intended meaning.

参考文献

- International Journal of TESOL Studies. (2024). *Articles list - TESOLUNION.ORG*. <https://www.tesolunion.org/journal/lists/folder/cMjkufOTBh/>
- OECD. (2023). *OECD Digital Education Outlook 2023: Towards an Effective Digital Education Ecosystem* (OECD Digital Education Outlook). OECD. <https://doi.org/10.1787/C74F03DE-EN>
- OpenAI. (2023a). *Teaching with AI / OpenAI*. <https://openai.com/index/teaching-with-ai/>
- OpenAI. (2023b). *言語学習における大きな隔たりを埋める / OpenAI*. <https://openai.com/ja-JP/index/duolingo/>
- Sharples, M. (2023). *Towards social generative AI for education: theory, practices and ethics*. <http://arxiv.org/abs/2306.10063>
- Yamaoka, K. (2024). ChatGPT's Motivational Effects on Japanese University EFL Learners: A Qualitative Analysis. *International Journal of TESOL Studies*, 6(3), 24-35. <https://doi.org/10.58304/ijts.20240303>
- 和久友親, 田村哲嗣, & 川瀬真弓. (2024). 学習者の理解度に応じた自動問題生成AIシステムの開発. 日本教育工学会論文誌, 48(2), 423-435. <https://doi.org/10.15077/JJET.48004>
- 小川亮, 小口裕, & 千田彩花. (2024). 生成AIの創造性寄与に関する一考察—チューハイのパッケージデザインを例に—. マーケティングジャーナル, 43(3), 55-67. <https://doi.org/10.7222/MARKETING.2024.006>
- 河原俊昭. (2014). 観光英語の授業に関するチェックリストの作成とその意義. In 塩澤正, 榎木蘭鉄也, 倉橋洋子, 小宮富子, & 下内充 (Eds.), *現代社会と英語 英語の多様性を見つめて* (pp.242-252). 金星堂.
- 田中博之. (2024). 生成AIを生徒が探究的な学習において活用する学習方法に関する一考察. 早稲田大学大学院教育学研究科紀要, 34, 33-44. <https://waseda.repo.nii.ac.jp/records/2001250>
- 野村総合研究所 nri. (2023). *生成AIとの共創がもたらす新たな未来*.